



■前号では、井上ひさしの著書『本の運命』から、『・・・言葉なしでは世界に立ち向かうことができない。だから言葉が、書物が大切なんです。』という内容の紹介と「読解力」について書きました。第6号では、井上ひさしの読書方法を紹介します。『本の運命』のページ55～74までの部分になります。斜体字以外は、本文からの抜粋です。

#### ■その一、オッと思ったら赤鉛筆

つまり、とにかく面白いと思ったら赤鉛筆で、線を引く。

僕の場合は本を読みながら、赤鉛筆かマーカーで、面白いとか「オヤッ」と思ったところに、どんどん線を引いていきます。わざわざ色分けなんかしないでいい。「これは自分が知らなかった」というところ、「この人はこれが言いたいのか」という勘どころ。

そうすると、読み終わった途端、自然に、いわばその本のダイジェスト版ができあがるわけですね。もう一度その本を読むとき、線を引いたところを読むだけで、大事なところがわかる。

ただ、読み終わって本をもう一度古本屋に売ろうなんていう人には向きませんので、ご注意ください。赤線が一本引いてあるだけで本の値段は悲劇的に下落しますから(笑)。

#### ■その二、索引は自分で作る

索引というのは、本の命なんです。いくらいい本でも、索引がなかったり、あってもお粗末だったりすると、がっかりすることがあります。それならいっそ自分で索引を作ってしまうというわけです。

本の扉とか見返しに、大切だという事柄、言葉をずーっとならべて、それがでてきたページを書いておく。そうすれば、これおはもう立派な索引です。

#### ■その三、本は手が記憶する

やや大きめの手帳を用意して、本でも新聞でもなんでも、これは大事だと思うことは書き抜いていく。その日、自分の目に触れて「ウン？」と思ったことを、ただ順番にずーっと書いていくだけなんです。あとで参照できるように、出典とかページ数とかも書いておきます。

#### ■その四、本はゆっくり読むと、速く読める

つまり、どんな本でも最初は、丁寧に丁寧に読んでいくんです。最初の十ページくらいはとくに丁寧に、登場人物の名前、関係などをしっかり押さえながら読んでいく。そうすると、自然に速くなるんですね。最初いいかげんに読んでいると、いつまでたってもわからないし、速くはならない。でも、本の基本的なところが頭に入ってくると、もう自然に、えっというぐらい速く読めるようになるんです。

#### ■その五、目次を睨むべし

これは、特に専門書の場合、大切です。専門書を読むときは、まず目次をじっくり読み込む。泥棒の名人が忍び込む前にその家の構えをじっくり観察するように、専門書を読むときは、その構造を前もって見破る。そうすると、全体の構成とか、論旨の進め方の見当がついてくる。急いでいるときは、その章を先ず読んでおいてという勘がはたらきます。

#### ■その六、大部な辞典はバラバラにしよう

これは、怒る人がいるかもしれませんね。(持ちやすく、外で読めるからという理由で、分厚い辞典を、カッターで3、4冊に分けるそうです。同じ辞典を2冊ずつ買ってその1冊をバラバラにするそうですが、あまり真似できませんね。一般向けではないと思います。)

#### ■その七、葉(しおり)は一本とは限らない

注釈が多い本だと、葉は1本では足りない。でも、最近の文庫本は葉がないものも多い。本のカバーを表紙にくっつける時に、タコ糸を挟んで、必要なだけ葉を付けるそうです。20本ぐらい付けたこともあるそうですが、葉がこんがらがってわけがわからなくなったようです。紙の葉を利用すればいいことなのでこれもどうでしょうか。

#### ■その八、個人全集をまとめ読み

これは個人的な興味なので、一般の方には無用かもしれません。でも、僕のような仕事の者には、個人全集を第一巻から最終巻まで集中して読むと、とても役に立つことがあるんですね。

#### ■その九、ツンドクにも効用がある

ですから、本を「買おう」と思ったときに、すぐ買って置く、これが鉄則です。「買いたいな」と思うのは、その本がこっこのどこかに訴えかけているからなんです。本の訴えをきいてあげれば、あとで必ず恩返しをしてくれます。

#### ■その十、戯曲は配役をして読む

戯曲を読むときは、自分の好きな俳優を配役して読んだら面白い、という内容です。

※参考になりましたか？井上ひさしの文章は、面白くわかりやすいです。とにかく本が大好きで蔵書は、なんと13万冊。故郷の山形県川西町に全部寄贈し図書館も作られたそうです。